

あるクエーカー教徒の日記

— John Bowne と信仰の自由について —

水 野 尚 之

新大陸に移住したヨーロッパ人たちは、それぞれが信仰する宗教ゆえにさまざまな困難に直面したが、そのなかでもクエーカー教徒たちがこうむった試練は特筆すべきものであった。この論文は、ニューヨークがまだニューアムステルダム（New Amsterdam）と呼ばれていた時代に、ひとりのクエーカー教徒が記した克明な日記を精読することを通して、この人物が守ったと称えられている「信仰の自由」を時代のコンテキストの中で検証することを目的とする。

New England において、支配的立場にあったピューリタンがクエーカー教徒をいかに迫害したかは、Nathaniel Hawthorne の作品にも詳しく描かれている。先祖がクエーカー教徒に対して行なった弾圧¹⁾についての Hawthorne の罪の意識が大きく反映しているといわれる短編“The Gentle Boy”（初出 1832 年）は、次のように書きはじめられている。

In the course of the year 1656, several of the people called Quakers, led, as they professed, by the inward movement of the spirit, made their appearance in New England. Their reputation, as holders of mystic and pernicious principles, having spread before them, the Puritans early endeavored to banish, and to prevent the further intrusion of the rising sect. But the measures by which it was intended to purge the land of heresy, though more than sufficiently

vigorous, were entirely unsuccessful. The Quakers, esteeming persecution as a divine call to the post of danger, laid claim to a holy courage, unknown to the Puritans themselves, who had shunned the cross, by providing for the peaceable exercise of their religion in a distant wilderness. Though it was the singular fact, that every nation of the earth rejected the wandering enthusiasts who practised peace towards all men, the place of greatest uneasiness and peril, and therefore in their eyes the most eligible, was the province of Massachusetts Bay.²⁾

1645 年 George Fox (1624-91) によつてはじめられ、その後イングランド国内で急速に勢力を拡大した教義を奉じるクエーカー教徒の集団 (Friends of Truth 後には Society of Friends) は、1656 年マサチューセッツ湾植民地に上陸している。その植民地においてすでに支配的立場にあったピューリタンたちは、「生けるキリストの内なる光」の導きのみを信じてピューリタンの教会や権威を否定するこの信仰集団に対して警戒を強め、その勢力を弱めるべく、罰金、投獄、鞭打ちなどといったさまざまな手段を講じた。しかしいこうに衰えないこの宗派に対して、1658 年には極刑をもつてのぞむ法案が可決された。そして翌年 10 月には、ピューリタンたちに説教をすることを強硬に主張した二人のクエーカー教徒がボストン広場で絞首刑となるという事態にまで至っている。“The Gentle Boy” に登場する少年 Ibrahim の父の死は、この絞首刑を指すものと考えられている。またこの作品でも言及されているように、1660 年には女性のクエーカー教徒もボストンで処刑されている。

クエーカー教徒が入植しはじめた当時の事情は、Hawthorne が描いた New England でも、New Netherland の中心地 New Amsterdam でも似たようなものであった。違いといえば、New England ではクエーカー教徒を迫害した中心人物が John Endicott や John Winthrop といったイギリス総督であった

のに対し、New Netherland では迫害をオランダ総督が行なったというにすぎない。1647 年以降 New Netherland は、第四代オランダ総督 Peter Stuyvesant の統治を受けることになる。牧師の息子として生れた彼は、若くして軍人となり、ブラジルや西インド諸島に在任中、戦闘で右足を失っている。「義足のピーター」と呼ばれたこの総督は、次々と住民を抑圧する政策を打ち出しはじめた。就任早々彼が出した布告は、日曜日の午後 2 時以前に客を受け入れたりアルコール類を販売したりすること、また平日でも午後 9 時以後はアルコール類を販売することを禁じるものであり、違反者には土地の没収と 6 ギルダールの罰金を科するという厳しいものであった。このような布告に見られる Stuyvesant 総督の独裁的な態度は、町を沈滞させただけでなく、さまざまな反発も招くこととなった。とりわけ Flushing³⁾の住民を怒らせたのは、1657 年の布告——クエーカー教徒を一晩でも泊めた者は罰金を科され、クエーカー教徒をこの地に運んできた船は没収——であった。彼らは、このような布告に対して、“Flushing Remonstrance”を総督に差し出すことにした。後の合衆国憲法に見られる宗教的寛容の精神の基となったといわれるこの歴史的な請願書は、Flushing の書記官 (town clerk) であった Edward Hart が、郡保安官 (sheriff) の Tobias Feake と相談の上起草したものであった。この請願書は、クエーカー教徒との交際を禁じた総督の布告の不当性を訴えた上で、次のように結ばれている。

Therefore if any of these said persons come in love unto us, we cannot in conscience lay violent hands upon them, but give them free egress and regress unto our Town, and houses, as God shall persuade our consciences. And in this we are true subjects both of Church and State, for we are bounde by the law of God and man to doe good unto all men and evil to noe man. And this is according to the patent and charter of our Towne, given unto us in the name of

the States General, which we are not willing to infringe, and violate, but shall houlde to our patent and shall remaine, your humble subjects, the inhabitants of Vlissing.⁴⁾

文中“the patent and charter of our Towne”とあるのは、1645年10月にオランダ西インド会社(The Dutch West India Company)のDirector GeneralであったWillem Kieftが住民に与えた特許状のことと思われる。そして1657年12月27日、31人の住民が、この請願書に、文字を書ける者は署名をし、書けない者はしるしをつけた。(この31人の中にはクエーカー教徒はいなかったとされている。)この請願書は郡保安官Tobias Feakeによって総督に届けられたが、これを読んだ総督の怒りはすさまじく、Feakeや起草者Hartの逮捕ばかりでなく、署名した者全員の投獄と罰金刑を招くこととなった。さらには、総督の布告に従おうとしない者に対しては、6週間以内に財産を処分し、植民地から去ることが命じられた。

Flushingの町がオランダのこのような支配を受けていた時期に、クエーカー教徒のひとりが克明な日記(*Journal*)を書き残している。この日記は、筆者のJohn Bowneなる人物が、(ユリウス暦の)1649年1月7日⁵⁾ボストンのMr. Philipに週給5シリングで雇われたという記述から始まる。この人物についてはある程度調べられており、それによると彼は1627年にイングランドのDerbyshire州Matlockに生れている。そして1649年、John Bowneは父Thomas、妹Dorothyとともに新大陸に渡り、ボストンに上陸して仕事を見つけたのであった。しかしまもなくJohnはボストンでの仕事をやめ、Nantasketからイングランド行きの船にひとりで乗り込んでいる。これは、ひとつには幼すぎるためにイングランドに残してきた妹Truthに会うためであった。その後Johnはふたたび新大陸に向かうが、彼が最終的に選んだ土地はボストンではなく、オランダの植民地New NetherlandにあるFlushingであった。John BowneがFlushingを定住の地に選んだ理由は明らかではないが、

この当時の Flushing がイングランド人にとってかならずしも住みやすい土地ではなかったことだけは確かである。Stuyvesant 総督は、イングランド寄りの活動をしていたという理由で Flushing の保安官 John Underhill を追放しようとしていた。また総督は、オランダ新教 (the Dutch Reformed) 以外の宗教活動に関して不寛容であり、Flushing の住民たちとの対立は深まりつつあった。ともかくも John は、このような情勢のなかで 1653 年 Flushing に土地を購入して農夫となった。また 1656 年 John は、Flushing の保安官 William Hallett と、地元では有名な “free-thinker” だった Elizabeth という夫妻の養女 Hannah Feke と結婚する。John の日記にはふたりの結婚生活に関する記述はほとんど見当たらず、その後ふたりの間に四男六女が生れた事実のみが淡々と記されている。⁶⁾

この日記が当時の New Netherland についての重要な資料となっている理由のひとつは、クエーカー教徒に対する弾圧の様相が生々しく描かれているからであるが、筆者である John Bowne とクエーカー教徒とのそもそもの接点とはかならずしも明確ではない。先にクエーカーに改宗したのは妻 Hannah の方で、John は森の中で行なわれていたクエーカー教徒の集まりに好奇心から参加したらしい、という推測もなされている⁷⁾が定かではない。John Bowne がクエーカーに改宗した時期を推察させる根拠としては、彼の日付の書き方がある。1658 年 10 月までは「月」の名前が書かれている — 10 月を October と書く — のに対して、1660 年 11 月以降は、クエーカー式の日付 — かれらは「月」の名前を書くことは異教的と考え、数字で書く。10 月は 10th month — で日記がつけられているのである。

クエーカー教徒としての John はまもなく受難の時期を迎えることになるが、それ以前にも彼のまわりで犠牲者が出始めている。妻 Hannah の養父 William Hallett は、クエーカーの牧師として Rhode Island から赴任してきた William Wickenden なる人物の活動を幫助したという理由で、保安官の職を解かれ、罰金を科せられる。保安官の後任として赴任した Tobias Feake も、

総督 Peter Stuyvesant の宗教的不寛容を諫めた先述の “Flushing Remonstrance” を、住民を代表して提出したことにより投獄されてしまう。そしてついに、総督の弾圧が John Bowne におよぶ日が来る。John の日記には、出来事の重要性を考慮してか、この時の様子が克明に記録されている。

in the year 1662 nustil on the first day of 7th month Resolved the scout Came to my house att vlishing with a company of meen with sords and gonns (where I was tending my wife being sike in bed and my yongest Child sike in my armes which was both soe Ill that wee watched too or three with them) hee tould mee I must goe with him to the generall I tould him my famiely was not in a condishon for mee to leu them hee sead hee could not helpe that hee must folow his order but would not show it mee ...⁸⁾

Flushing における異教徒の活動を警戒していた Stuyvesant 総督は、John Bowne が日曜ごとに自宅（1661 年完成。後には Bowne House と呼ばれる）でクエーカー教徒に集会を行なわせている、という内偵者の報告を受け、ただちに John の逮捕を命じた。上の引用からは、総督の命を受けた役人（Resolved Waldron）が、銃と剣で武装した部下とともに John の家に押しかけて出頭を命じたこと、また妻 Hannah と一番下の子供（生後一年半の Marie）が病気のためにとっても出頭に応じられそうにないと John が答えていること、しかしこの役人はあくまで総督の命令を遂行しようとした（ただし令状は John には見せない）ことが読み取れる。結局 John は、翌日家族からひとり引き離されて船で Manhattan 島に送られ、総督邸の向かいにある拘置所に入れられる。そして翌日から John と総督との緊迫したやりとりが始まるのだが John のクエーカー教徒ゆえのあまりにもかたくなな態度は、彼の日記の読者をしばしば当惑させる。まず翌日すぐに対面を求めたのは John のほうであっ

た。これに対して、帽子を取るのであれば面会する、という総督からの返事が伝えられる。権力者に対して脱帽することは、地上では万人は平等であるとするクエーカーの教義に反するゆえに、John は脱帽を拒否する。これを聞いた総督は面会を拒否する。John の日記には、このやりとりが周りの兵隊たちの爆笑を招いたことも記されている。（“soe the solgers did breke out in lafter at itt,” p. 20）

翌日 John は総督の前に引き出され、総督の部下によって、拒否する前に帽子を脱がされてしまう。尋問において John は、クエーカー教徒の集会を自宅で行なっていた事実については、それが「異教徒、詐欺者、誘惑者」（“heriticks decuers sedusers,” p. 20⁹）の集会という表現がなされたために、否定も肯定もせず、ただ家に残された妻と子供たちの窮状を訴えたのみである。結局 John に下された判決は、罰金 25 フランダース・ポンドと裁判費用を支払うというものだった。¹⁰ しかし罪状を否認する John が罰金の支払いも拒否したために、彼は独房に入れられ、食事も粗末なパンと水だけにされる。John の日記からは、Stuyvesant 総督がなんとか彼を精神的に屈服させようと、この後の数ヶ月間様々な試み——牢の鍵をかけない、妻や友人の面会を許可する、などの懐柔策や、罰金を支払わない場合は追放するという脅し——をしていることが分かる。そして John が屈しないと見るや、総督は彼に3日間の外出許可を与え、この colony から退去するならば自由を与えるという条件まで提示する。John が3日間の外出を利用してこのまま逃亡することを総督が密かに望んでいたことが、日記の次のような文から読み取れる。

on the 3 day of the weeke before my time was out I came to monadose [Manhattan] and went amongst the marchants by the weay house and Stinwicke went with mee to his house and as hee did knock at the dore resolved came by so Stinwicke spake to him to tel the gouerner I was come and to aske him If I might haue to

bee abrod in the toune and I spake to him also and hee torned himselfe about vpon his heele and lafed and seemed to byte his tong and wonder its like hee thought I would not haue come agene (pp. 23-24)

John は約束の時間より前に牢に戻り、Stuyvesant 総督を驚かせている。そして望みどおり彼は翌週中町を歩く自由を与えられるが、その不屈の信仰に対して総督が下した最終的な決定は、植民地からの追放だった。

逮捕から約3カ月後の12月29日、John は停泊中の船に所持品を積み込むことを命じられる。John の日記には、総督との面会を許可された彼が総督邸で見たものと、彼自身が要求したことが記されている。

soe I went to his house and was caled in to a pryvet rounge where hee with one of his writers was a writing to send for holand and was very bisie as hee tould mee

Soe I tould him I hard hee ment to send mee away in the shipe and I did desier to know wherefore so hee tould mee because I did not anser the sentence of the Corte soe I asked him if that was onely and a lone the case hee sead yea then I desierd hee would giue it mee soe vnder his hand that If any should aske mee I myght haue it to shew soe after some more words hee went to writing him selfe and then gaue it to his secetary to writ feare and then set his name to it and the secetary alsoe then the gaue it mee but it was not in those words as wee had spoken I alsoe asked him what the shipe master should doe with mee hee tould mee put me ashore ether in holland or any-where where the shipe put in or to that porpose hee speake

(pp. 24-25)

総督の私室に入った John は、自分を追放する理由を尋ねる。これに対して総督は、法廷の判決に応じないからである、とのみ答えている。次に John は自分を追放する理由を自筆で書いてくれるように総督に要求している。これに応じて総督が書いた文書は英語ではなくオランダ語で書かれていたが、ともかくもこの文書が、この後の John の運命に大きく関わってくる。また総督が、John を植民地から追放しようとしているものの、追放先はどこでも良いと考えている（“ether in holland or anywhere where the shipe put in”）ことも上の文から読み取れる。総督にとっては、この扱いにくいクエーカー教徒が New Netherland 植民地から出ていってくればそれでよく、John がその後どうなろうと、何をしようと興味はないといったところであろう。しかし、John Bowne というクエーカー教徒の堅忍不拔さに対するこのような判断の甘さが、後に総督自身に大きな打撃を与えることになるのである。

John の日記からは、彼が一貫して自分と総督とを対等な関係として考え、それを態度に表わしていることが読み取れる。Stuyvesant 総督が John を扱いあぐねているのも、彼のそのような態度のゆえといえよう。しかし、迫害される者としての恐怖や、信仰を貫くことへの躊躇といった、普通の日記の読者ならば当然予想するような人間的な弱さは、John の日記からはいっさい読み取れない。日記には信仰の揺らぎを見せるような文章を書かない、というのが当時のクエーカー教徒に見られる共通した特徴なのか、John Bowne だけのことなのかは今後の研究課題としたい。しかし、病床の妻や何人もの子供たちを家に残して、自らの信仰の正当性だけを主張して権力者と対峙し、数ヶ月に及ぶ投獄も、この先どうなるかもまったく不明な追放も辞さない John の行動は日記の読者に奇異の念を抱かせてもしかたがないともいえよう。Hawthorne の “The Gentle Boy” においても、死の床にある娘を捨てて内なる声に従った老クエーカー教徒や、内なる声に従って、幼い息子を残して各地をさまよう母親が登場する。クエーカー教徒の信仰や行動についての Hawthorne の観察眼が正確であるとするならば、この短編に登場する狂信的ともいえるクエーカー

一教徒と、家族の苦しみや権力者からの迫害にもまったく動じる気配なく信仰を貫こうとする John Bowne とは、多分に共通するものがあるのではないだろうか。

1662 年 12 月 31 日, John は船に乗せられて New Netherland 植民地から追放される。偶然とはいえ, この船の名が, John の属する宗派の創始者と同じ Fox であったことはいかに皮肉である。彼の日記には, Fox 号の出航について次のように書かれている。

then on the 3 day of the weeke when the peeple was redy to goe the scout put mee in the bott and soe I was Caried a bord then the 4th day of the weeke being the 31st day of the tenth month ould style wee set seall about the midel of the day and went out to sea and for nere a fortnight wee had for the most part very hard wether in which time wee had too sore stormes out of which the lord did wonderfully deliuer vs presed bee his name for euermore (p. 25)

船に乗せられて追放されるというのに, 筆者が実に淡々と事実のみを記していることに読者は驚かされる。総督の弾圧に対する憤りを抑えているのではなく, どうやらそのような感情を抱いていない(あるいは, 抱いてはいけないと思っている)らしいことが, 出航直前の John と総督とのやりとりから分かる。

“I had spoken something as to my inoscency towards them and how clere I was from desiering any hort vnto them or any reuenge vpon them for any thing the had done agenst mee,” p. 25) John Bowne のクエーカー信仰の一面をかいま見させる箇所である。また, 出港後 Fox 号は二週間というもの悪天候や嵐にもまれている。そして John が神に感謝しているのは船がその苦難から脱した後であることも, 現代人の眼には奇妙なレトリックとも言えなくもない。

悪天候にみまわれて大きく航路はずれた Fox 号は、目的地のオランダではなくダブリンに入港している。ここで John にとって幸いなことが二つ起きている。その一つは、アムステルダムに出頭することを条件に、アイルランドで自由を与えられたことであり、John はこの自由を最大限に活用している。もう一つは、渡航費用の未払い（New Netherland 植民地当局は、John を追放するための船賃を Fox 号に対して支払うことをせず、John も自分が追放される費用を支払うことを拒否した）のために、船に積んであった John の所持品は船長によって没収されたものの、隠し持っていた書類が没収を免れたことである。

アイルランドで自由な行動を許された John は、その地のクエーカー教徒の援助を得てすぐにイングランドに渡り、クエーカー教徒の家に宿を借りながら多くの“friends”に会っている。Chester の近くにある“House of Correction”には 30 人ほどのクエーカー教徒が収容されていた、などという記述も見られるが、総じて彼の日記からは、当時のイングランドにいかにも多くのクエーカーが互いに連絡を取りながら散在しているかがうかがわれる。まもなくオランダに渡った John は、ロッテルダムにおいて指導的なクエーカー教徒であった Benjamin Forely という裕福な商人の援助を受ける。オランダ語が話せない John にとって、オランダ西インド会社と交渉するには Forely のような人物がぜひとも必要であった。

一方、ダブリンで John を降ろした Fox 号は、そのまま航海を続けオランダに到着した。この船には、Stuyvesant 総督が John Bowne の追放に関してオランダ西インド会社にあてて書いた書簡（1663 年 1 月 9 日付け。総督が John に渡した文書とは別物）が積まれており、その文書は西インド会社に届けられた。つまりオランダ西インド会社は、John Bowne 本人が到着するより先に、New Netherland 植民地における Stuyvesant 総督のクエーカー教徒に対する処罰の実態を知ることになったのである。この手紙は現存しており、その英訳は以下のようなものである。

Right Honorable, Worshipful Gentlemen:

In our general letter we omitted to relate the troubles and difficulties which we and many of the good inhabitants some time ago met with and are still daily experiencing from the sect called Quakers. . . Among others we have, on account of his transgressions, condemned one of their principal leaders, John Bowne, in accordance with the placards, in a fine of fl. 150 in seawan, for the payment of which he has been now under arrest for about three months, in spite of which he remains obstinate and continues to refuse to pay the same, so that we have at last resolved, or rather were compelled, to send him out of the province by this ship, in the hope that others might thereby be discouraged. If by this means no cure or improvement is wrought in others, we shall against our inclination be compelled to proceed against such persons in a more severe manner, for which we first and previously solicit your Honor's wiser and farther seeing judgment. . . . (pp. 64-65)

この書簡には、John Bowne というクエーカー教徒を捕えて3カ月間投獄しておいたが、態度が改まらず罰金の支払いも拒否したため、「他の者たちを落胆させるために」(“in the hope that others might thereby be discouraged”) John を植民地から追放したという事実が述べられており、さらに、このような手段によってもなお異教徒たちの言動に改善が見られぬ場合はより厳しい処置もやむなしと Stuyvesant 総督が考えていることが記されている。総督のこのような方針によほど強い危機感を抱いたらしく、西インド会社はただちに総督あてに次のような指示を送っている。(英語訳を記す。)

Your last letter informed us that you had banished from the Prov-

ince and sent hither by ship a certain Quaker, John Bowne by name: although we heartily desire, that these and other sectarians remained away from there, yet as they do not, we doubt very much, whether we can proceed against them rigorously without diminishing the population and stopping immigration, which must be favored at a so tender stage of the country's existence. You may therefore shut your eyes, at least not force people's consciences, but allow every one to have his own belief, as long as he behaves quietly and legally, gives no offence to his neighbors and does not oppose the government. As the government of this city has always practised this maxim of moderation and consequently has often had a considerable influx of people, we do not doubt, that your Province too would be benefitted by it. (pp. 70-71)

1663 年 4 月 16 日付けのこの書簡には、オランダ西インド会社が New Netherland 植民地においては人口の増加を最優先事項と判断していることがはっきり表われている。この植民地はまだ植民の初期の段階であり、人口の減少をもたらしたり移民を阻害するような政策は避けねばならない。それゆえ、住民が隣人に危害を加えたり政府に敵対するような行動を取らないかぎり、為政者は「目をつむって」彼らに自由に信仰させておくことが望ましい。このような理由から、オランダ西インド会社本部は Stuyvesant 総督に行動を改めさせているのである。

一方 John Bowne は、各地のクエーカー教徒たちに援助を受けながら、同年 4 月 29 日ついにアムステルダムに到着した。その翌日オランダ在住のクエーカー教徒 Benjamin Forely とともに西インド会社本部を訪れた John は、文書で次の二点を要求している。一つは、Fox 号の船長によって没収された自分の所持品の返還であり、もう一つは New Netherland 植民地における信仰

の自由である。この要求をした後二週間ほど待たされた John は、委員会 (committee) から召喚される。委員会の対応は表面的には穏やかなものであり、彼らの前に出た John は帽子を脱ぐことも強制されない。John の要求に関しても、委員会は、没収された所持品については返却することをその場で約束している。しかし植民地における信仰の自由については、委員会は注意深く即答を避けている。

John はこの後さらに数日待たされるが、所持品は、彼が渡航費用の支払いを拒否したために、結局戻ってこないことが明らかになる。手紙による再三の要求の末、John は 5 月 25 日に担当の責任者 Perkins 卿と会見することができたが、Perkins 卿は、所持品の件を無視したばかりか、John に家族を呼び寄せてオランダに住むことを勧めている。植民地における John の自由を保証できないというのがその理由だが、John は、オランダ西インド会社の Director General であった Willem Kieft が 1645 年 10 月 Flushing の住民に与えた特許状 (前出) の写しを渡しつつ、Perkins 卿の提案を断固として拒否する。これに対して Perkins 卿は、Kieft の特許状はクエーカー教徒の存在が広く知られる以前に出されたものである、と言いつ返している。¹¹⁾ John と Perkins 卿のやりとりは進展を見せず、やがて John はオランダ語で書かれた書類に署名することを求められる。しかしその書類は、英訳してみると、かつて Stuyvesant 総督が彼に要求したのと同じ条件を盛り込んだものにすぎなかった。このような対応に答えて書いた John の次のような文書には、さすがに怒りに近い感情が込められていることが読み取れる。

Friends, the paper drawn up for me to subscribe I have perused and weighed, and do find the same not according to the engagement to me through one of your members, viz.: That he or you would do therein by me as you would be done unto, and not otherwise. For which of you being taken from your wife and family, without just

cause, would be bound from returning to them unless upon terms to act contrary to your conscience, and deny your faith and religion, yet this in effect do you require of me and not less. But, truly, I cannot think that you did in sober earnest ever think I would subscribe to any such thing, it being the very thing for which I rather chose freely to suffer want of the company of my dear wife and children, imprisonment of my person, the ruin of my estate in my absence there, and the loss of my goods here, than to yield or consent to such an unreasonable thing as you here by would enjoin me unto... I have with patience and moderation waited several weeks expecting justice from you, but behold an addition to my oppression in the measure I receive. (p. 69)

この文書以降の、John Bowne と Perkins 卿の交渉の展開については史料が残っておらず、John の日記から推測することができるだけである。オランダ西インド会社本部は、一方では Stuyvesant 総督にあてて植民地での宗教的迫害をやめるように指示しており、Perkins 卿を代表者とする委員会が John に対して取ってきた方針と明らかに矛盾している。この理由としては、John に対してはあくまで追放された一個人として委員会が粗略に扱っていたことが考えられる。また、さんざん待たせたあげくに結局放免した形で John が New Netherland 植民地へ帰るのを許可しているところを見ると、ある段階で西インド会社本部が方針を伝えて、委員会に対応の仕方を変えさせた可能性もある。

ともかく John Bowne は 5 月 30 日、アムステルダムを離れることを許可されている。しかし使命感からであろうか、John はすぐにはヨーロッパから去ろうとせず、各地のクエーカー教徒を訪問している。オランダ国内だけでも Leyden, Delf, Rotterdam を回り、イングランドに渡ってからは、London,

Matlock, Nottingham を訪れたことが日記に記されている。そしていよいよ Falmouth から帰路についたのであるが、船が大きく南寄りの航路を取ったために、彼が New Netherland 植民地に戻ったのはアムステルダムを出発してから 10 カ月後の、1664 年 3 月 30 日であった。家族との再会の場면을 John は日記に次のように書いている。

the 30th day in the marning wee arued [arrived] att new amsterdam
and the same day I Came to my Owne house being the first house I
entered intoo in the Contrie where I found my famylie in good helth
preses [Praises] to the lord for euer (p. 39)

New Amsterdam に着いた John は、さすがに真っ先に自宅に戻っている。かつて Stuyvesant 総督の部下によって引き離された際には病身だった妻 Hannah も子供も健康であった。実に一年半ぶりの再会であり、全員が無事だったことの喜びを、John はいかにも彼らしく神への感謝という形で表現している。また Stuyvesant 総督も、オランダ西インド会社の指示に従って宗教的迫害をやめていた。路上で偶然 John と再会した時の総督の様子を描写した、次のような文が残っている。

Some time after his Return, the Governour meeting him in the
Street, seemed ashamed of what he had done, and told him, he was
glad to see him safe Home again, and that he hoped he should never
do so any more to any of his Friends.¹²⁾

John の日記にはこのような再会の場面は書かれておらず、「総督は自分の行為を恥じているように見えた」などという描写も、John Bowne を英雄視するあまりのフィクションである疑いも消えない。また、地元の Flushing 地区で

現在たびたび使われている、New Netherland 植民地における信仰の自由を John が為政者から勝ち取った、というような表現も正確とはいえないだろう。たしかに Stuyvesant 総督は宗教的迫害をやめたが、それは John Bowne の主張によってではなく、John の追放を機に、オランダ西インド会社が植民地での迫害の実態を知り、当面の目的にそぐわないと判断して迫害をやめさせたからにすぎないのである。

西インド会社は植民地の人口を増加させることを優先事項と判断していたわけであるが、実際には彼らの予想を上回る形で事態は進展していく。John が戻ってわずか5カ月後の1664年8月、New Netherland 植民地は Richard Nicholls に率いられたイギリス軍の侵攻を受ける。そして翌月には、Stuyvesant 総督がほとんど何の抵抗も試みることができぬままに、オランダは植民地の支配権をイギリスに明け渡すことを余儀なくされたのである。こうして38年間続いたオランダによる支配は終わりを告げた。これとともに New Netherland という名称は消滅し、この植民地は York 公にちなんで New York と命名されたのである。(1673年にオランダが奪回し New Orange と命名したが、それもわずか半年で終わった。)

このように政治的には激動の時代であったが、そこに住む住民は比較的平穩に暮らしていたようである。イギリスの植民地 New York の総督となった Nicholls は、オランダ系移民に対しても寛容に接し、1666年2月には信仰の自由を認めたかつての“Flushing patent”を確認している。また Edmund Andros 総督の統治下の1678年には、この植民地にはおよそ20の宗派の教会が数えられている。John Bowne と Hannah 夫妻のその後を見てみよう。John の日記によれば、彼はこの植民地に戻ってきた後もう一度イギリスへ渡っている。今度は Hannah も一緒であった。この夫婦はロンドンに着くと別々に行動しており、Hannah の方は、クエーカーの創始者 George Fox が彼女のために書いた次のような紹介状を携えての旅であった。

My dear friends, you may assist Hannah Bowne in her journey and help he forward thither; for she came from Long Island in New England to see me and friends....I desire thee and some of your woman's meeting to assist Hannah Bowne when she goes beyond the sea for she is an honest woman and I know her well.

8 mo. 18 day 1675 George Fox

(p. 73)

この伝道旅行中に Hannah は死ぬ。妻の死について、John の日記の記述は驚くほど短い。

My dearly beloued wife hannah Bowne leaid downe heir bodie att the house of Jo and Mary Elson in london the 2d day of ye 12th month 1677

John Bowne

(p. 17)

John はこの後も伝道旅行を続けている。クエーカー教徒の最も重要な仕事は、使徒としての自覚を持ち、各地をまわって「永遠の福音」を説く伝道活動であるとされており、¹³⁾ Hannah も John もこの教えを忠実に守ったといえよう。John Bowne は 1695 年に Flushing で死んでいる。彼の死後 Bowne House は、その時点で生存していた最年長の息子 Samuel に受け継がれた。Bowne House にはその後も Bowne 家の子孫が住み続けたが、1945 年には The Bowne House Historical Society によって買い取られ、現在は初期のクエーカー教徒の生活をしのばせる記念館として保存されている。John と Hannah が信仰を守り通した舞台となったこの建物のまわりには、アジア系移民が大部分を占める高層アパートが立ち並び、昔日の面影はない。これがかつ

て New Netherland 植民地であった Flushing の現在の姿であり、この地区は、Manhattan 島の経済発展の波を今後も受け続けるだろう。

注

- 1) 新世界における第一世代である William Hathorne (c. 1607-1681) はクエーカー教徒迫害の中心人物であった。
- 2) Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, IX: Twice-told Tales* (Columbus: Ohio State UP, 1974) 68.
- 3) 当時は Vlissing とか Fflushing と呼ばれていた。この地名はオランダの町 Vlissingen に由来するといわれている。
- 4) Haynes Trébor, ed., *The Flushing Remonstrance* (Flushing, New York: The Bowne House Historical Society) 4.
- 5) John Bowne の日記では、イギリスで 1752 年まで使われていたユリウス暦を使っている。ユリウス暦では、一年は 3 月 25 日に始まり 3 月 24 日に終わる。
- 6) この日記には、回想として書かれている部分と、当日書いたと思われる部分が混在している。See Herbert F. Ricard transcribed and edited, *Journal of John Bowne: 1650-1694* (New Orleans: Friends of the Queensborough Community College Library and Polyanthos, 1975) 58-59.
- 7) Philip Horne, *John Bowne and Freedom of Religion in New Netherland* (New York: Bowne & Co. Inc., 1973) 5.
- 8) Herbert F. Ricard transcribed and edited, *Journal of John Bowne: 1650-1694*, p. 19. 以下 John Bowne の日記への言及は頁数を添えて示す。この日記の 54 頁以降は Ricard による注釈。
- 9) Stuyvesant 総督は 1658 年 1 月 21 日に自分が出した布告を読み上げていると思われる。布告には次の表現が見られる。“abominable Heresy called Quakers; seeking to seduce many, yea, were it possible, even true believers.” *Journal of John Bowne: 1650-1694*, pp. 61-62.
- 10) John Bowne に対する判決の記録が 1662 年 9 月 14 日付けで残っている。
“Whereas John Bowne, now a prisoner, residing at Flushing, on Long Island, has dared, in contempt of our orders and placards. . . to provide with lodgings some of the heretical and abominable sect named Quakers and even permitted that they keep their forbidden meetings at his house. . . [we] condemn the aforesaid John Bowne to an amende of twenty-five pounds Flanders and to pay all costs. . . for the second time, he shall pay double amende, and for the third

time to be banished out of the province.” *Journal of John Bowne: 1650-1694*, p. 62.

- 11) クエーカーは Kieft の特許状が出されたのと同じ 1645 年に創始されている。
- 12) Joseph Besse, *A Collection of the Sufferings of the People Called Quakers for the Testimony of a Good Conscience*, 1753, II, 237; rpt. Philip Horne, *John Bowne and Freedom of Religion in New Netherland*, p. 12.
- 13) Lewis Benson, “New Foundation Papers” (Philadelphia: New Foundation Group, 1985) ; 小泉文子訳『クエーカー信仰の本質』(教文館, 1994 年), p. 25.